

故郷の人物を知ろう

たかおか 温故知新

公益に尽くした侠客 きょうかく 大長 だいちょう (1771~1856)

大長は幕末高岡の有名な侠客です。定塚町に生まれ、蓮花寺屋伝右衛門と称しました。本業は「大工」、幼名は「長右衛門」であったので人々は長長と呼びました。

侠客とは「義侠、任侠を建前としていた人。江戸時代には、町奴、ばくち打ちなど、無法者が多かった」と辞典にあります。中には「弱きを助けて強きをくじく」を地でいく大親分もいました。大長もそんな一人で、困窮した者には衣食を与え、罪を犯した者でも来る者は拒まず家族のように接し、諭して自首を勧めたので、彼の周りには人が集まりました。ある時、巻き添えで牢に入れられ拷問を受けた際には、全く動じずに高いびきをかき、流暢に無実の旨を述べ、釈放されたそうです。またある時、峠道でばくち打ちに囲まれた

際には逆に一か八かの賭事を持ちかけ、その豪胆さにばくち打ちが平伏したと伝わっています。また高岡に芝居小屋を建てたり、相撲興行を催したりしました。高岡関野神社には、大長が作り直した神鏡が今も掛けられています。

大長最大の功績は、庄川に大門橋（現大門大橋よりやや下流）を架けたことです。大長の橋建造の請願は長年藩に許可されませんでした。大長は一途に出し続け1847年によりやく認可されました。大長を慕う大勢の人々の努力により翌年竣工しました。

『高岡市史』は大長を「慈悲あり、才能あり、度胸あり、義気あり、まことに見事な快男児」と評価しています。

（仁ヶ竹主幹）

問合先 博物館 TEL 20-1572



侠客大長の碑（横田町・長楽寺内）